

齋藤唯信先生の業績

名 畑 應 順

齋藤唯信先生は最も果報の勝れた方であつた。財閥の名望家で特に信徳の厚かつた、齋藤金衛翁を父として誕生せられ、この父君の志願と支持とによつて、得度して學業に精しみ、またその所住の念佛寺を創立せられた。それは父君の深く満悦せられたところであつたと聞く。

先生の體軀は極めて壯健であり、その雅號の不老仙が示す如く、老年に及ぶまで若々しさを保たれ、曾て人々は先年の年齢を知らぬほどであつた。古稀を過ぎられた頃から、脚部に疾患を生じ、多少歩行が覺束なくなつて、よぼよぼするやうになつたが、端からそれを勞はると、いつも「脚だけぢや」というて、苦笑してゐられた姿を想ひ起すことである。いかにもその後約二十年にも互り、先生の身體の他の部分は健全に活用されてゐたやうである。晩年の四、五年間は中風に罹つて、四肢の自由を失ひ、平臥されてゐたが、それでも頭腦は明快で、記憶の確かなことなどは驚くばかりであつた。昨年十一月重態に陥られ、四十餘日間も昏睡状態を續けられてゐてさへ、なほよく榮養を攝取して、體力を保持され、内臟諸機關の強靱さには、さすがの醫師も驚嘆したとのことである。それは實に先生の血統に於ける遺傳でもあつたらしい。

かくて先生は生き得る限りを生き盡くし、學界に於ける功績にも報ひられ、宗門に於ける功勞にも應へられて、數へ年九十四歳といふ高壽を全うして、晏然として入寂されたのである。平素、令室が懇ろに給仕せられ、先生が病臥されてからも、その耳目となり、手足となつて、獻身的に看護せられ、不自由をさせられなかつたといふことも、先生にとつて、大きな幸福であつたやうに思はれる。

先生が高倉學寮に學ばれた頃には、徳川末期以來の佛教學の碩匠が多く、先生はそれらの人々に就て、それぞれ傳統ある學業を受けられた。宗乘に於ては、香山院龍溫、香涼院行忠、雲澗院神興等の諸師に就き、餘乘に於ては、主として眞成院千巖師に従つて學ばれた。また本派の楠本玉諦師から華嚴を受け、天台の石泉僧正から止觀を聴かれたこともあつたといふことである。

明治二十二年、二十六歳で東京に移られた先生は、先づ以て英語の學習に志されたらしいが、母君の病氣のために一時歸郷され、その後心境の變化によつて、これを中止された。後年に至つて常にこれを遺憾とされたといふ。併し先生が後來進んで佛教學の研究に新しい分野を拓かれたといふことは、青年時代に早くも東上して、一般學界の新氣運に接し、時代に即する學問方法を修得されたことに因るものと思はれる。

先生は村上專精師と共に明治時代に於ける佛教學の先驅者として、不朽の功績を立てられた。その遺された多數の著作は、これを證するに餘りあるであらう。現在の歴史的、または科學的な方面に於て著しく進歩した佛教學の觀點から顧みれば、或

は時に物足らないものがあるかも知れないが、明治中期のいは啓蒙時代に於て、諸宗の講壇に立ち、数々の勞作を發表して、後進を開導された功勳は、永く多としなければなるまい。

先生の學問は佛教學としては、殊に法相と華嚴とに通じ、宗學としてはいふまでもなく、祖典に傾倒された。その學風は從來の訓話的な方法に對して、著しく違意的であつた。諸先輩の分析的な傾向から進んで、特に綜合的であつた。著作等身ともいふべき多數の著述に就て見ても、大意、大綱、總論、概論と名づけられるものが多く、經論章疏の講義に於ても、科段の立て方が嚴重である。講壇にあつても、常に大綱の把握に注意せられ、「科文半學」という言葉を繰返し口にして、學徒を啓導されたことを記憶する。

夙に英才として聞えた先生は、明治二十三年、二十七歳の若さを以て、東京大谷教校の副校長に任じ、同年、東洋大學の前身たる哲學館の講師になつてゐられる。爾來二十五年間、東都に於て、眞宗大學を始め、曹洞宗大學、東洋大學、豊山大學、宗教大學等、諸宗の大學の教壇に立たれた。眞宗大學の移西によつて、大正三年に、先生としては愛著の深かつた東京の地を離れて、京都に移住せられた。爾後、眞宗大谷大學、及び舊制大谷大學の長老教授に任じて、佛教學と眞宗學の講述に主力を注ぎ、傍ら京都帝國大學の講師を勤め、大谷派本山に宗學院が開設されるや、その指導にも當られた。この間に安居の本講に任ぜられたこと、前後三回に及んでゐる。明治、大正、昭和の三代にかけ、實に五十五年の久しきを経るまで、宗門内外に互つて、教育に盡瘁されたこと、先生の如きは、恐らく他に比類

を見ないであらう。

昭和十五年に、先生の喜壽記念號として、大谷派の宗學院から發行された『眞宗研究』の巻頭に、先生は「教育五十年を回顧して」と題して、曾てその際會せられた國家宗門の時代情勢を顧みつつ、教育事業に携はつた閻歴を語つてゐられる。そこには弱氣も視はれ、稚氣も雜つて、いかにも人間としての先生の面目がよく現はれてゐて、ほほゑまじく讀まれるところもある。この文章の中で、先生は五十年間の講義を時代別にし、初の十年間は専ら餘乘を講じ、次の十五年間は一方に偏せず、宗乘と餘乘とを並べ講じ、次の十五年間は宗乘を主とし、餘乘を傍として説き、最後の十年間は純ら宗乘を説いた時代、と區分してゐられる。いかにも先生らしい分け方であるが、必ずしも各時期に於て、かやうに意圖された譯ではなかつたとしても、先生講學の志向とその推移とを示してゐられるものとして注目させられる。

太平洋戦争も敗戦の色濃くなつた、昭和十九年九月に、令嗣が應召されたのを機として、先生は在留三十年の京都を離れて、故郷の新潟へ歸住されることとなつた。自坊は夙にみづから開基せられた先生が、東西に出遊中にも、隨時歸郷して、かねて堂宇の輪奐を整へられてあつた。先生は爾後その自坊にあつて、教化に怠られることなく、終戦の年から、法要行事の場合は勿論、毎月定例として二日間の法席を開かれたことが七年間も續いた。また發病される直前の昭和二十八年三月まで、唯信講語として、門前の掲示板によつて傳道し、各地方の信者にもそれを印刷して配布されること、百八十三回にも及んだとい

ふ。寺門の經營にもよく力められたものである。

倉皇として京都を離れられた先生は、もう一度入洛して、御眞影にお暇申し上げ、在京の知人にも留別したいといふのが念願であつたらしい。併し次第に老病に逼られて、遂にその機を得られなかつたのが遺憾だつたやうである。また餘命を傾けて、地方の教化に盡されてあつても、晩年の十餘年を教學の中心から全く遠ざかつてゐられたことは、先生のやうな方には一入淋しかつたことと察せられる。令姪の渡邊圓流氏が發企して、先生の米壽に際して、廣く先生の知友門下の墨蹟を需め、百人に近い人々の書畫詩歌を二冊に裝釘して「徳香帖」と題し、枕頭に獻呈されたこと、並びに昭和三十一年十一月、法主台下が親しく病床を見舞はれたことは、晩年の先生を大いに慰められた美擧として、特筆すべきであらう。

齋藤唯信先生年譜

- 元治元年（一八六四） 一 歳
- 十二月、新潟市關屋町念佛寺齋藤教信の三男として誕生す
- 明治五年（一八七二） 九 歳
- 新潟市内開設の時習寮に入り「四書」「五教」等の漢籍の素讀をなす
- 明治七年（一八七四） 十一 歳
- 七月、得度

明治十二年（一八七九） 十六 歳

九月、僧侶として宗餘乗修學のため、三條市に開設中の三條
教校に入學

明治十五年（一八八二） 十九 歳

十月、三條教校を修了

明治十六年（一八八三） 二十 歳

五月、眞宗大學寮（高倉學寮）へ入學

明治十七年（一八八四） 二十一 歳

八月、教導職試補に任ぜらる

眞宗大學寮に於て選ばれて常在所化となる

明治十八年（一八八五） 二十二 歳

九月、父の跡を繼ぎ念佛寺の住職となる

明治十九年（一八八六） 二十三 歳

十二月、眞宗大學寮に於て専門常在所化通期學課の卒業證書
を授與さる

明治二十年（一八八七） 二十四 歳

眞宗大學寮に於て因明學、石泉僧正に就て天台教學を專攻

有志に對し「三十唯識述記」講讀

明治二十一年（一八八八） 二十五 歳

十二月、學階准學師の稱號を授與さる

有志に對し「俱舍論」を講讀

明治二十二年（一八八九） 二十六 歳

九月、東上して一般學研究の基礎として英語を學修

明治二十三年（一九〇〇） 二十七 歳

八月、東京大谷教校の副校長に任ぜられる

九月、哲學館の講師となる

明治二十四年 (一八九一) 二十八歳

四月、母順教院妙信逝去

十二月、學階五等學師の稱號を授與さる

明治二十六年 (一八九三) 三十歳

八月、學階四等學師の稱號を授與さる

明治二十七年 (一八九四) 三十一歳

三月、「阿彌陀佛總論草案」一卷を刊行

四月、東京大谷教校校長になる

七月、學階改正となり、改めて學師の稱號を授與さる

八月、「佛教通俗講義」に執筆の「俱舍宗大意」完結につき、

一冊に纏め刊行す

九月、東京第二中學寮主幹に任せらる

明治二十八年 (一八九五) 三十二歳

八月、「佛教唯心一貫論」一卷を刊行

八月、眞宗東京中學主幹兼教授を命ぜらる

「唯識三十論講義」一卷を刊行

明治三十年 (一八九七) 三十四歳

三月、東京第二中學寮主幹を退職

明治三十一年 (一八九八) 三十五歳

三月、「俱舍論講義」一卷を刊行

八月、淨土宗高等學院の招聘により教授となる

明治三十二年 (一八九九) 三十六歳

十月、僧綱權僧都に補せらる

明治三十四年 (一九〇一) 三十八歳

十月、眞宗大學教授の命を受け、宗乘、佛教概論、淨土教史を講義

學階擬講の稱號を授與さる

明治三十六年 (一九〇三) 四十歳

四月、「佛教論理の大觀」一卷を刊行

明治三十七年 (一九〇四) 四十一歳

二月、「七祖之大綱」一卷を刊行

三月、「華嚴五教章講義」一卷を刊行

明治三十八年 (一九〇五) 四十二歳

一月、曹洞宗大學の教授となる

五月、僧綱僧都に補せらる

「唯識三十論講義」一卷を刊行

「俱舍論頌講義」一卷を刊行

明治三十九年 (一九〇六) 四十三歳

六月、哲學館改稱東洋大學の教授となる

明治四十年 (一九〇七) 四十四歳

四月、「佛教學概論」一卷を刊行

五月、「信仰と修養」一卷を刊行

五月、學階副講の稱號を授與さる

明治四十一年 (一九〇八) 四十五歳

二月、「大無量壽經講義」一卷を刊行

同月、父稱佛院教信逝去

四月、豊山大學の教授となる

明治四十三年 (一九一〇) 四十七歳

五月、講本「選擇集講要」二巻を刊行

同月、夏季安居開講、「選擇本願念佛集」を講義

八月、「佛教論理」一卷を刊行

明治四十四年（一九一三） 四十八歳

三月、僧綱權大僧都に補せらる

九月、學校條例の改正、學制の統一のため、大學が東京より

京都へ移されるや、願に依り眞宗大學教授を解かる

大正元年（一九一二） 四十九歳

十二月、東洋大學顧問となる

大正二年（一九一三） 五十歳

十月、東京宗教大學の教授となる

大正三年（一九一四） 五十一歳

九月、東洋大學、曹洞宗大學、豊山大學、宗教大學の教授を

退職す

十月、眞宗大谷大學教授の命を受く

十二月、「眞宗歴代傳灯」一卷を刊行

大正四年（一九一五） 五十二歳

四月、僧綱大僧都に補せらる

九月、京都帝國大學文學部講師に任ぜらる

大正五年（一九一六） 五十三歳

九月、「阿彌陀經講義」一卷を刊行

同、「選擇集講義」一卷を刊行

大正六年（一九一七） 五十四歳

十一月、「華嚴普賢行願品講義」一卷を刊行

大正七年（一九一八） 五十五歳

八月、學階講師の稱號を授與さる

「阿彌陀佛總論」一卷を再刊行

大正九年（一九二〇） 五十七歳

二月、耆宿に任ぜらる

同、安居本講を命ぜられ「正信偈」を講す

七月、安居本講「正信念佛偈講義」を刊行

十月、「華嚴學講要」一卷を刊行

大正十年（一九二二） 五十八歳

六月、待薰寮出仕を命ぜらる

九月、「眞宗の信仰と其教義」一卷を刊行

十月、「眞宗信仰の對象」一卷を刊行

大正十二年（一九二三） 六十歳

四月、文部省例による大學昇格につき大谷大學教授兼眞宗大

谷大學教授に任ぜられ「佛教概論」を講す

大正十三年（一九二四） 六十一歳

二月、權僧正に補せらる

四月、大谷大學専門部教授に囑託さる

昭和元年（一九二六） 六十三歳

八月、文學博士の學位を受く

昭和二年（一九二七） 六十四歳

四月、大谷大學専門部教授を兼任

「淨土教史」一卷を刊行

昭和三年（一九二八） 六十五歳

三月、夏安居本講の命を受く

七月、「教行信證御自釋講要」二冊を刊行

同、安居開講につき「教行信證御自釋」を講す

十月、「佛敎道德の根本義」一巻を刊行

十二月、文部省より御大典記念として三十年以上教員勤続に

つき表彰状並硯箱を授與さる

昭和四年(一九二九) 六十六歳

十一月、宗務顧問に任ぜらる

昭和五年(一九三〇) 六十七歳

四月、宗學院指導の命を受く

六月、願により大谷大學學部教授兼専門部教授の役務を免ぜ

らる

同、大谷大學名譽教授の稱號を授與さる

昭和六年(一九三一) 六十八歳

三月、願に依り京都帝國大學文學部講師を退職

昭和十一年(一九三六) 七十三歳

七月、大谷大學評議員を委嘱さる

昭和十四年(一九三九) 七十六歳

十二月、僧綱僧正に補せられる

昭和十五年(一九四〇) 七十七歳

一月、夏安居本講の命を受く、講本「教行信證御自釋眞化二

卷」

四月、先考先妣の報恩のため旁々教育五十年記念のために東

京大東出版社より「他方信仰の極致」一巻を刊行

昭和十六年(一九四一) 七十八歳

權大僧正に補せらる

十月、「我信念の餘歴」を刊行

昭和十九年(一九四四) 八十一歳

九月、宗學院指導を退職

二十七歳よりここに至る五十五ヶ年間教育に従事(東京二

十五年、京都三十年)

昭和二十六年(一九五一) 八十八歳

十一月、米壽祝の節、存命院號、香松院を許可さる。昭和二

十年よりここに至るまで毎月定例布教(二十八日、十二日、

父の命日)を行ふ

昭和二十八年(一九五三) 九十歳

三月、發病。昭和二十年十月よりここに至るまで、唯信講話

として門前に揭示板にて布教す

昭和三十一年(一九五六) 九十三歳

十一月、法主台下親ら病床を見舞はる

昭和三十二年(一九五七) 九十四歳

十二月、大僧正に補せらる

同二十二日、逝去